HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	談話研究における「フレーム」の概念を再考する
Author(s)	水島, 梨紗
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 5, 97-102
Issue Date	2009-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38217
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_p97-102.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【研究ノート】

談話研究における「フレーム」の概念を再考する

水島　梨紗
国際広報メディア・観光学院　専門研究員
mizushima-sml@syd.odn.ne.jp

１．はじめに

談話分析による相互行為研究の中でしばしば言及される概念の一つに、「フレーム」がある。当該の領域においては、フレームが「その場の出来事に対する参加者の認識の枠組み」を指して用いられるのに対し、別の分野では同じ用語が異なる意味づけの下で使用されてきた。本論は、現在談話研究の中で一般的に用いられているフレームの定義がどのような流れから生じたものかを確認し、自然会話の分析における当該概念の汎用性について考察するものである。

まずは、言語学の関連領域のうち、フレームという術語を採用してきた分野をカテゴリー別に紹介し、それぞれの定義について概説してみよう。

２．先行研究

フレーム、およびそれに深く関連するスキーマやスクリプトといった抽象概念は、人間の言語活動の諸相を説明づけるために、認知心理学、社会学、文化人類学等の幅広い分野で使用されてきた[1]。本節では、それらの抽象概念に対するアプローチの違いから先行研究を二つのカテゴリーに分け、それぞれの特性を論じた上で、談話研究における定義の由来について確認する。

２．１　認知心理学的アプローチ

このカテゴリーに属する分野は、主に人間の言語活動の根底をなす体系化された知識の解明に関心を置いてきた。本論の注目する抽象概念を巡って先行研究をたどると、元来は神経学の領域で用いられていた「スキーマ」という用語を心理学の世界に取り入れた、Frederic Bartlett の研究に行き着く。Bartlett (1932) によると、スキーマとは「過去の経験や外部環境についての構造化された知識」を指すものであり、そのような人間の知識環境は外部からの刺激に関連づけて刻々と組み替えられ、変化するものであるとされた。

この Bartlett のイメージは、後に Marvin Minsky に代表される人工知能学者により踏襲された。言語システムのコンピューター化を目指す人工知能の分野では、Bartlett のスキーマの概念が「フレーム」という用語の下で再定式化されたが、彼らの解釈するフレームとは、ステレオタイプ化した情報の積み重ねによる知識データの総体であり（Minsky, 1975, p. 212）、概して静的なイメージを与えるものである。その一方で、出来事の理解に動的な時間軸を加えた概念は「シナリオ」と称され、こちらは Schank & Abelson (1977) による拡張を受けて「スクリプト」という概念がもたらされることとなった。Schank & Abelson が描いた有名なレストランのスクリプト（客が店に入ってから飲食を終えて出てくるまでの連続的な出来事のイメージ）は、過去の経験から構築される知識の典型例を示したものである。

我々の知識構造が固定化されたものか、可変的なものかという議論については、本稿の目的から逸脱するため割愛するが、少なくとも当該の認知心理的／人工知能的アプローチが擁する最大の前提――すなわち、我々の認知行動が過去に構築された知識に基づくという事実は、もはや一般常識として広く周知されていることである。人は、経験的知識に照らして状況を把握し、またこれから起こるであろう出来事の展開を大よそ予測することができる。先のレストランの例のように、日常生活の中でルーティン化された行為については、難なくその過程を想起することができるが、それは必ずしも身体的な行為に限られるものではなく、会話という相互行為の場においても同様のことが言える。

上の認知心理的／人工知能的アプローチが対象とするところは、言語活動の背景にある知識、および言語の産出と理解に関連する心的プロセスにある。しかし、個人に内在的な認知的側面に傾倒するあまり、本来重要であるはずの実践的な言語使用の問題が脇に置かれる傾向にあった。次節では、逆にそのような相互行為の側面に重きを置く領域を紹介する。

２．２　社会学的アプローチ

前節で述べたとおり､認知心理学および人工知能の観点から捉えたフレームとは、個人の内部に構築された知識の総体を指すものであったが、相互行為という側面を重んじる社会的立場の研究者は、独自の観点から全く異なるイメージを提示してきた。

社会学的アプローチによるフレームとは、平易な言い方をすれば､「今、この状況下で、自分たちが何を行っているか」を特定する際の、参加者の認識の枠組みである。この定義は、Bateson (1972 [1955][2]) に端を発するとされる。Batesonは、自身が訪れた動物園で子ザルがじゃれ合っているのを目撃し、2 匹の間でそのような行為が成立する背景には、それが戦いではなく遊びであるという認識を相互に可能にするような、シグナルの交換があると考えた。人間のコミュニケーションについても同様の印象を抱いた彼は、上記のフレームの概念を打ち立てるとともに、フレーミングを可能にする言外のメッセージを「メタ・メッセージ」と称した。

この Bateson の概念を応用し、より純粋に社会学的な視点から相互行為の緻密な分析を行ったのが、Erving Goffman である。相互行為の秩序に最大の関心を置く Goffman にとってのフレームとは、とめどなく連続する出来事の一部を組織立てて経験する際の、一種の原理である（“each primary framework allows its user to locate, perceive, identify, and label a seemingly infinite number of concrete occurrences defined in its terms”, Goffman, 1974, p. 21)。我々は、日常の一瞬一瞬をすべて厳密に認識しながら生活しているわけではない。それが、その状況の中で起こっていることを意識した時点でフレーミングが起こり､「一見して雑多な経験断片群が相互に位置と関係を得、カテゴライズされて、関連する活動の中で一個の経験へとまとめあげられる」(安川, 1991, pp. 10-11)。Goffman の記述するフレームとは、非常に脆く、目まぐるしく変化するものである。それに合わせてコミュニケーションの当事者の相対的な位置取りも変化することが考えられ、Goffman (1981) は、その足取りとも言うべきものを「フッティング」と称した。

Goffman は、Bateson の理論を積極的に継承し、上記のような複雑な概念を新たに導入することで人々の言動を詳細に分析したが、社会学的アプローチの代表格と

しての彼の関心は、参加者の知識体系でも、言語システムそれ自体でもなく、あくまで可変的な社会状況への反応として起こる相互行為にあった。言語学の中でも、Goffman のこのような思想を強く支持する立場があり、例えば語用論学者の Jacob Mey などは、相互行為を規定するのは社会的状況であり、参加者個々人の取り組みが会話の展開に寄与するところは全くないと論じた（Mey, 2001, p. 14)。このような純粋に社会学的な視点は、一定の真理を含むものの、しばしば相互行為の担い手である参加者の裁量を過小視する傾向があり、慎重な議論を要するところである。少なくとも、本来参加者に帰するべき要素を相互行為の流れから完全に排除しようとする姿勢は非現実的であり、何らかの形で認知心理学的な側面への歩み寄りが必要であった。

２．３　談話研究への応用

2.1、2.2 で論じたように、フレーム等の抽象概念に対しては、アプローチごとに別個の意味づけが行われてきた。本論冒頭の定義が示すように、現行の談話分析は、主としてフレームの解釈を前出の Bateson (1972) に依拠する傾向が強いが、そこには「相互行為の社会言語学（Interactional Sociolinguistics)」と呼ばれる分野が深く関係している。

この学問領域を提唱した言語人類学者の John Gumperz は、Bateson の理論や Goffman の相互行為分析に影響を受け、言語と社会構造の相関関係を探るための調査研究を行った。ただし、彼が想定したフレームの概念とは、言わば先の社会学的アプローチと認知心理学的アプローチの折衷案であり、会話に従事する人物は、コンテクストや相互行為の目的、対人関係などに関する背景知識を前提として、その場で起こっていることを認識（フレーミング）すると主張した（Gumperz, 1982, pp. 2-3)。

相互行為の社会言語学では、相互行為の諸相に人々の背景知識が反映されるという想定の下でフィールドワークを行い、人々の言語行動と、背後にある社会的要因（地域、文化、民族、年齢、社会的階級、性別など）との因果関係を探る。 Gumperz (1982) は、これらの社会的要因がフレーミングに影響することを示すために、談話分析の手法を用いた。例えば、同じイギリス国民でも、イングランド人とインド系の移民との間では沈黙やうなずきに対する解釈に差があり、それがフレーミングの齟齬を生むことがある。Gumperz は、人々の用いる「談話のストラテジー」（参加者が相互に手がかりを示しながら行う、コミュニケーション上の方略）には文化・社会ごとに違いがあり、社会的要因の差異が時に当事者間の誤解の原因となり得ることを、談話上の根拠を基に実証した。

この Gumperz の方法論をより日常的なやりとりの場に応用したのが、社会言語学者の Deborah Tannen である。Tannen もまた様々な概念を用いて参加者の属性が会話に与える影響を論じてきたのだが、特に目下の話題である抽象概念に言及した研究に、Tannen (1993) がある。その中では、スキーマ、フレーム、スクリプトなどについて詳細なレビューが行われており、さらにそれらすべてを包括する概念として、Ross (1975) より「期待の構造」という用語が援用された。

> To uncomplicated matters, however, all these complex terms and approaches amount to the simple concept of what R. N. Ross (1975) calls "structures of

> expectations," that is, that, on the basis of one's experience of the world in a given culture (or combination of cultures), one organizes knowledge about the world and uses this knowledge to predict interpretations and relationships regarding new information, events, and experiences. (Tannen, 1993, p. 16)

Tannen (1993) が行ったのは、アメリカ人とギリシャ人の被験者に映像を見せ、その内容についてインタビューするという実験であり、いわゆる自然会話の分析とは異なるものである。しかし、ここでも人々の過去の経験が知識に蓄えられ、その知識体系が新たな状況における解釈の道筋になるという前提が明確に示されている。参加者の「期待」とは、その人物が目の前の出来事を解釈すなわちフレーミングする際に抱く想定の表れであり、その想定とは、言うまでもなく文化・社会的な背景に影響を受けた個々人の知識体系の産物である。

既に述べたように、相互行為の社会言語学の主たる目的は、人々の談話解釈と文化・社会的背景との関係性の証明にあるため、議論の落とし所は常に異文化や性差などといった参加者の社会的属性に関連するものであった。しかし、この分野により確立された談話フレームの概念は、よりミクロなレベルでの考察――すなわち、少人数の対面相互行為の分析にも応用可能なものである。次節では、自然会話の分析における当該概念の汎用性について触れる。

３．自然会話の分析における「フレーム」

相互行為の社会言語学以降、談話分析の手法に基づく自然会話の研究分野では、フレームという用語が頻繁に用いられるようになった。例えば、医師と女児患者、その母親のやりとりを分析した Tannen & Wallat (1993) は、医師と母親との間の背景知識の差がフレームの変更（フレームシフト）を誘発することを明らかにしたし、複数のフレームが有機的に関連し合い、参加者が自在にフレーム間を移動する様子を記した Linell & Thunqvist (2003) なども興味深い。

人々の共在の場において、刻々と変化する相互行為の状況を描写する際、フレームは非常に利便性に富む概念である。「枠組み」という表現ながら、その境界線が厳しく規定されることはなく[3]、むしろ「膜」にも例えられるほど脆く移ろいやすいイメージが与えられ[4]、談話のサイズに合わせて自由にサイズが設定できるという変幻自在さが、あらゆる事象の説明を可能にしてきた。

その手軽さの反面、出来事のフレーミングについては検討を要する場合もある。談話研究にしばしば見られる傾向として、相互行為における現状認識と、そこでのやりとりにタイトルを付けること（「今起こっていることは…だ」）が、同義的に捉えられることがある。その一例として、次の Straehle (1993) の記述を参照されたい。

> Put simply, frames are like *labels* that we use to identify what we and our interlocutors are doing, and metamessages, conveyed through linguistic and nonlinguistic cues, determine how it is that we know which *labels* to choose. (Straehle, 1993, p. 213) （強調は筆者による）

先の Bateson (1972) の例を借りれば、動物園のサルの行動は、それが遊びであ

るというメタ・メッセージを伴い、「喧嘩」ではなく「遊び」としてのラベルが付与されることになる。このような解釈は非常に明快で、直感に訴えるものがあるが、我々の言語行動を説明づける上で、決して完全であるとは言えない。

例えば、ある企業に顧客からの苦情が寄せられた場面を仮定しよう。上に倣い、「今、苦情の申し立てが行われている」というラベルが適用されたところで、進行中の相互行為に対する当事者の認識が十分に説明されたことにはならない。なぜならば、そのような場における「状況」とは、ある種の帰結（問題の解決等）に向けた相互行為のプロセス全体を想定しない限り、実質的な意義を持たないためである。このような事例は決して例外的ではなく、むしろコミュニケーションに携わる人々がその会話に関して何らかの展望を持ち、相互行為のプロセスにおける自らの立ち位置を見積もりながらやりとりを進めることは、ごくありふれた行為である。

そのような場合、相互行為における状況理解とは、出来事に対するアドホックな意味づけというよりも、むしろ「現行の出来事はどのように方向づけられたもので、いかなる展開が見込まれるか」という相互行為のプロセスを包含して行われるべきである。つまり、フレームは単なるラベルやタグのように平面的なものではなく、会話の方向性を展望するための時間軸を含む概念として再解釈されることが望ましい。筆者は、からかい表現の実例を用いて、そのような時系列的視点を含むフレームモデルの作成に努めてきたが、今後はさらに様々なタイプの談話に分析対象を広げることにより、参加者の認識の枠組みや言外での働きかけについて、より妥当性のある説明を行っていく予定である。

４．今後の展望――まとめに代えて

近年の方法論の発達により、談話分析の可能性はさらなる広がりを見せており、先の抽象概念に関しても、実質的なデータに即した議論が盛んに行われてきた。

フレームとは、単に状況に応じて適用されるものではなく、むしろ参加者自身により能動的に操作されるものと考えるべきである。そのような取り組みの解明を通じて、当該分野の研究や、実践的なコミュニケーション教育に何らかの示唆をもたらすことが、筆者の当面の目標である。

参考文献

安川 一 (2000).「共在」の解剖学―相互行為の経験構成― 安川 一（編）ゴフマン世界の再構成―共在の技法と秩序―　世界思想社 pp.1-31.

Bartlett, F. C. (1932). *Remembering: A study in experimental and social psychology of mind.* Cambridge: Cambridge University Press.

Bateson, G. (1972). A theory of play and fantasy. In G. Bateson (ed.), *Steps to an ecology of mind* (pp. 177-193). San Francisco: Chandler.

Bednarek, M. A. (2005). Frames revisited: The coherence-inducing function of frames. *Journal of Pragmatics, 37,* 685-705.

Goffman, E. (1961). *Encounters: Two studies in the sociology of interaction.*

Indianapolis: Bobbs-Merrill.
Goffman, E. (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience.* Cambridge: Harvard University Press.
Goffman, E. (1981). *Forms of talk. Philadelphia*: University of Pennsylvania Press.
Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies.* Cambridge: Cambridge University Press.
Linell, P. & Thunqvist, D. P. (2003). Moving in and out of framings: Activity contexts in talks with young unemployed people within a training project. *Journal of Pragmatics, 35,* 409-434.
Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction* (2nd. ed.). Malden: Blackwell
Minsky, M. (1975). A framework for representing knowledge. In P. H. Winston (Ed.), *The psychology of computer vision* (pp. 211-277). New York: McGraw Hill.
Minsky, M. (1977). Frame system theory. In P. N. Johnson-Laird & P. C. Wason (Eds.), *Thinking: Readings in cognitive science* (pp. 355-376). Cambridge: Cambridge University Press.
Ross, R. N. (1975). Ellipsis and the structure of expectation. *San Jose State Occasional Papers in Linguistics, 1,* 183-191.
Schank, R. C., & Abelson, R. P. (1977). *Scripts, plans, goals, and understanding: An inquiry into human knowledge structures.* Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
Straehle, C. A. (1993). "Samuel?" "Yes, dear?": Teasing and conversational rapport. In D. Tannen (Ed.), *Framing in discourse* (pp. 210-230), New York: Oxford University Press.
Tannen, D. (1993). What's in a frame?: Surface evidence for underlying expectations. In D. Tannen (Ed.), *Framing in discourse* (pp. 14-56), New York: Oxford University Press.
Tannen, D. & Wallat, C. (1993). Interactive frames and knowledge schemas in interaction: Examples from a medical examination/interviews. In D. Tannen (Ed.), *Framing in discourse* (pp. 57-76), New York: Oxford University Press.

[1] これらの概念に関しては、Tannen (1993) の他、Bednarek (2005) にも包括的なレビューがある。
[2] Bateson (1972) は、1954 年アメリカ精神分析学会の地区別研究報告会での研究発表を、1955 年の "Approaches to the Study of Human Personality" に収めたものの再版である。
[3] Bateson (1972), pp. 186-187.
[4] Goffman (1961), p. 55.